


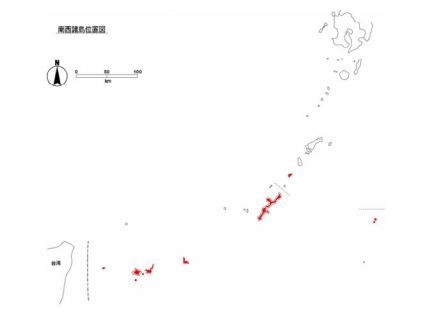
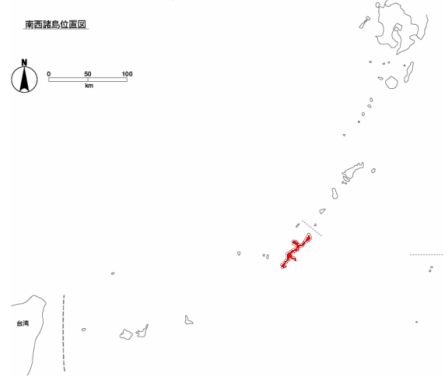
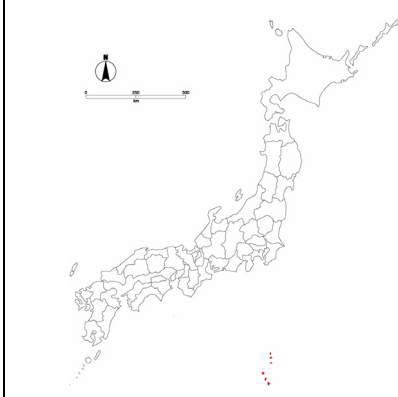


1. クビワオオコウモリ <i>Pteropus dasymallus</i> Temminck, 1827	環境省 CR*1
	<div data-bbox="1050 237 1493 600">  <div data-bbox="1362 237 1493 309"> 飛翔中 </div> </div> <div data-bbox="1050 600 1493 936">  <div data-bbox="1350 887 1493 936"> 生息環境 </div> </div>
<p><u>分布</u></p> <p>大隅諸島、トカラ列島、沖縄島、宮古列島、八重山列島、大東列島に分布する。</p>	
<p><u>形態</u></p> <p>前腕長 120～145mm、頭胴長 190～250mm。体重 320～530 g。眼が大きい。尾はない。第 1 指、第 2 指に爪をもつ。第 1 指の爪は鍵状に突出し、極めて大きい。第 2 指の爪は飛膜から僅かに出ている程度である。体全体が褐色の体毛に覆われ、頸部のみ淡黄色のため首輪模様に見えることから名付けられた。亜種間（ヤエヤマオオコウモリ、オリイオオコウモリ、ダイトウオオコウモリ、エラブオオコウモリ）で体長や体毛色に差が見られる。</p>	
<p><u>生態</u></p> <p>昼間は木の陰で休息するほか採餌もおこなう。超音波は出さず、目視により生活する。果実を中心に花も採餌する。顎の力は強く歯も鋭いため堅果でも砕くように噛んで汁分を摂り、ペリットを吐く。栽培されている柑橘類の果実や収穫後のサトウキビに餌付いた例がある。爪で果実の付いた枝をたぐり寄せることができる。一年に一度初夏に 1 仔を産する。生後約 6 か月で成獣と同程度に成長する。</p>	
<p><u>その他</u></p> <p>亜種エラブオオコウモリ、ダイトウオオコウモリは国の天然記念物に指定されている。</p> <p>*1：口之永良部島亜種エラブオオコウモリ、大東列島亜種ダイトウオオコウモリがCR指定</p>	
<p><u>参考文献</u> 1)、2)、3)、6)、7)、43)、49)</p>	

2. オキナワオオコウモリ <i>Pteropus loochoensis</i> Gray, 1870		環境省 EX
写真無し	写真無し	
	写真無し	
<u>分布</u> 19 世紀に沖縄島で 3 頭の採集記録があるのみで詳細不明。 20 世紀以降は記録がない。国外種との関係も不明である。		
<u>形態</u> これまでに 2 頭の標本しか知られていない。これらの前腕長は 136 mm と 143.5 mm であった。頭胴長の測定値は不明である。尾はない。クビワオオコウモリに似るが、相違点は下腿背面が無毛で裸出する点である。		
<u>生態</u> 詳細は不明である。		
参考文献 1)、2)、7)、43)、49)		

3. オガサワラオオコウモリ <i>Pteropus pselaphon</i> Layard, 1829		環境省 CR
写真無し	写真無し	
	写真無し	
<div>分布</div> <p>日本の固有種である。小笠原諸島に分布する。</p>		
<div>形態</div> <p>前腕長 120～145 mm、頭胴長 200～250 mm、体重は 390～440 g。体毛色は全体が黒っぽく、光沢のある銀色の差し毛がある。前述のクビワオオコウモリのような首輪模様は見られない。尾はない。眼は大きい。第 1 指、第 2 指に爪をもつ。特に第 1 指の爪が大きく、かぎ状になっている。第 2 指は少し爪が出ている程度である。</p>		
<div>生態</div> <p>昼間は木の陰で休息する。超音波は出さず、目視により生活する。主に果実を中心に採食するが、花や若い葉も食べる。食べ物を口に入れ、よくかみ砕いて果汁を飲み、ペリットを吐く。栽培植物の熱帯果実に餌付いた例がある。第 1 指、第 2 指の爪を用いて移動したり、食べ物を引き寄せたり、押さえたりすることができる。一年に一度初夏に 1 頭の仔を出産する。</p>		
参考文献 1)、2)、6)、49)		

4. キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* Schreber, 1774

—



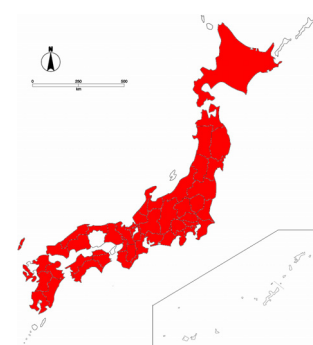
抱子する母獣



昼間のねぐら(廃坑)

分布

北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、佐渡、対馬、五島列島、大隅諸島に分布する。



形態

前腕長 56～65 mm、頭胴長 63～82 mm、尾長 28～45 mm、体重 17～35 g。体毛色は薄い茶褐色で濃色の翼との色の違いが目立つ。顔の中央に鼻葉と呼ばれる皮膚が発達したひだ状構造を持つキクガシラコウモリ科コウモリとしては大型種である。耳珠はない。幅広く短い翼を持つ。経産個体では下腹部に擬乳頭が1対発達するが、必ずしも左右対称ではない。

生態

昼間の休眠には自然洞穴に加えて、導水路、廃坑などの人工洞穴を利用するほか、物置や廃屋などの建物も利用する。洞穴で出産哺育コロニーを作るが、家屋内で出産する例もある。鼻から CF 型の超音波を出す。休息時には翼で体を覆い隠した中から足が上に突出した形で懸下する。おもに飛翔昆虫を採餌するとされる。鋭い犬歯と大きな臼歯でコウチュウ類もかみ砕く。木の枝で懸下して付近を通過する餌を待って短時間の飛行で採餌をおこなうと言われる。このため採餌場所や食餌場所の直下で餌昆虫の翅が多量に集中して落ちているのを観察することがある。一年に一度、初夏に1仔を出産する。幼獣は母獣の擬乳頭をくわえてしがみつき、小さい幼獣を抱えて採餌飛行することもある。幼獣が母獣と同程度の大きさに成長しても育児を続けることが観察される。

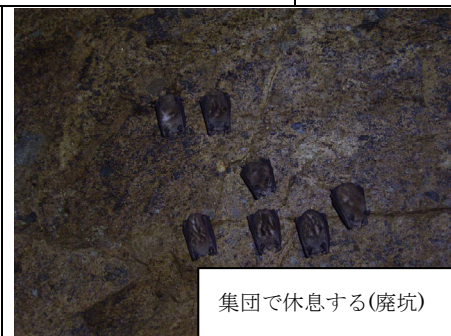
参考文献 1)、2)、7)、16)、17)、21)、24)、25)、27)、31)、32)、33)、34)、40)、46)、49)、56)、58)

5.コキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus* Temminck,1835

環境省
VU*1



成獣



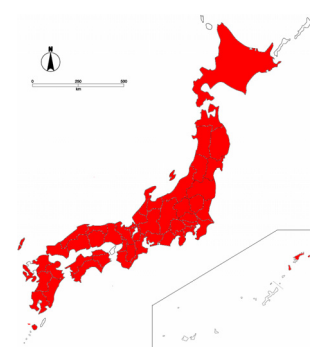
集団で休息する(廃坑)



昼間のねぐら(自然洞窟)

分布

北海道、本州、四国、九州、佐渡、伊豆諸島、対馬、壱岐、五島列島、大隅諸島、奄美群島から知られる。



形態

前腕長 36～44 mm、頭胴長 35～50 mm、尾長 16～26 mm、体重は 4.5～9.0 g。同科のキクガシラコウモリと比較して小型。体毛色は淡茶褐色。鼻葉と呼ばれる複雑形状に発達した皮膚のひだが顔中央にある。耳珠はない。広くて短い翼を持つ。経産個体では下腹部に擬乳頭が1対発達する。

生態

昼間の休眠には自然洞穴のほか、導水路、廃坑などの人工洞穴を利用する。同一洞内でも季節によって利用場所を変えることもある。採餌は草原、森林などで行われるが、深い繁みの中でも草本層の間を飛翔できることが観察されるように、非常に狭い隙間の奥にあるねぐらへも飛んで入ることが可能である。鼻からC F型の高い超音波を出す。主としてチョウ目の柔らかい昆虫を捕食する。枝や岩に懸下して短時間の飛行で採餌すると言われる。一年に一度、初夏に1仔を出産する。同種での出産コロニーを作るが、他種との混群で育児することもある。

その他

*1：奄美諸島亜種オリイコキクガシラコウモリがVU指定されている。

参考文献 1)、2)、7)、16)、17)、21)、24)、25)、27)、31)、32)、33)、34)、35)、39)、40)、44)、46)、48)、49)、56)、58)、61)、62)

6. オキナワコキクガシラコウモリ *Rhinolophus pumilus* Andersen, 1905

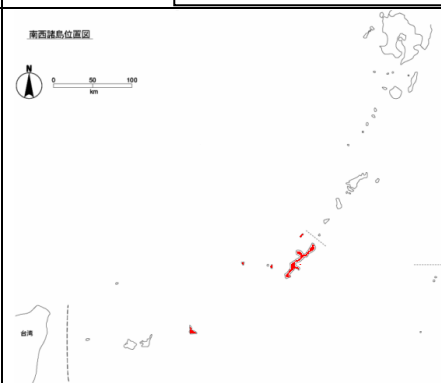
環境省 CR*1, EN



昼間のねぐら(自然洞窟)

分布

沖縄諸島、宮古列島に分布する南西諸島固有種である。



形態

前腕長 38～42 mm、頭胴長 38～46 mm、尾長 18～24 mm、体重は 5.0～8.0 g。体毛色は褐色で九州以北のコキクガシラコウモリより濃色である。広くて短い翼を持つ。鼻葉と呼ばれる複雑形状に発達した皮膚のひだが顔中央にある。鼻葉の下部の幅がヤエヤマコキクガシラコウモリよりも小さい。鼻から超音波を出す。耳珠はない。経産個体では下腹部に擬乳頭が 1 対発達する。

生態

昼間は洞穴を利用し、集団で休息する。一年に一度、初夏に出産する。本種はコキクガシラコウモリと異なり、冬眠しないと考えられる。鼻から C F 型の超音波を出す。

その他

*1：亜種ミヤココキクガシラコウモリ *R.p.miyakonis* が CR 指定されている。

参考文献 1)、2)、7)、43)、49)

7. ヤエヤマコキクガシラコウモリ *Rhinolophus perditus* Andersen, 1905

環境省 EN,
VU*1



成獣



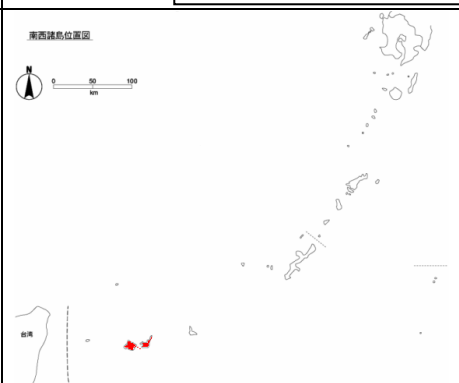
集団で休息する(自然洞窟)



昼間のねぐら(防空壕)

分布

八重山列島に分布する。先島諸島固有種である。



形態

前腕長 40～44 mm、頭胴長 41～50 mm、尾長 17.5～21.5 mm、体重 6.5～9.0 g。褐色系の体毛を持つ。鼻葉と呼ばれる複雑形状に発達した皮膚のひだが顔中央にあり、鼻葉下部の幅がオキナワコキクガシラコウモリよりも広い。広くて短い翼を持つ。耳珠はない。経産個体では下腹部に擬乳頭が1対発達する。

生態

昼間は洞穴を利用して休息する。一年に一度、初夏に1仔を産する。採餌は主に樹木で被われた林内を利用すると言われる。極めて狭い場所を飛行することができる。本種はコキクガシラコウモリと異なり、冬眠しないと考えられる。鼻からCF型の超音波を出す。

その他

*1：亜種イリオモテコキクガシラコウモリ *R.p. imaizumii* がVU指定されている。

参考文献 1)、2)、7)、8)、43)、49)

8.カグラコウモリ *Hipposideros turpis* Bangs,1901

環境省 EN



成獣



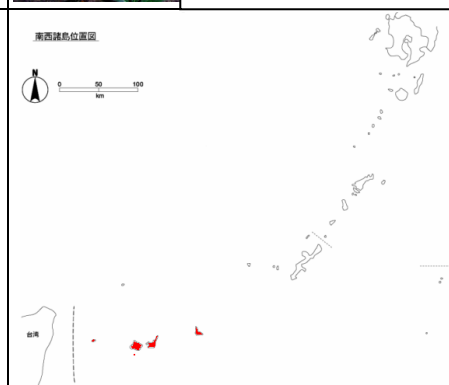
集団で休息する(自然洞窟)



昼間のねぐら(防空壕)

分布

八重山列島に分布する。¹⁾



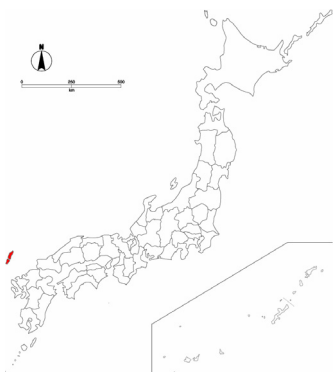
形態

前腕長 65～72 mm、頭胴長 68～89 mm、尾長 40～52 mm、体重 25～32 g。キクガシラコウモリ科と同様に鼻葉を持つが、キクガシラコウモリ科のそれとは違った形をしており、鼻葉上部が尖らない。雄の額には臭腺がある。体毛色は褐色。耳珠はない。経産個体は下腹部に 1 対の擬乳頭が発達するが左右非対称であることが多い。幼獣は擬乳頭をくわえて母獣にしがみつく。

生態

昼間は自然洞穴のほか、防空壕などの人工洞を利用して休息する。洞穴内では隣の個体との距離を保ち、体を接触させることなく懸下する。一年に一度、初夏に 1 仔を出産する。出産場所は自然洞だけでなく人工洞の利用例も多い。採餌場所は樹木で被われた場所を利用するとされる。開けた空間を飛翔して通過することも観察されるが密な林内を飛翔する能力にも長ける。同地域に生息するヤエヤマコキクガシラコウモリが冬季でも活発に採餌活動を行うのに対して、本種は厳冬期の一時期に短期間であるが冬眠するとされる。鼻から C F 型の超音波を出す。

参考文献 1)、2)、7)、8)、43)、49)

9.クロアカコウモリ <i>Myotis formosus</i> Hodgson,1835		環境省 DD
写真無し	写真無し	
	写真無し	
<u>分布</u> 国内では対馬でのみ採集記録があるが、10 頭以下と僅かである。周辺国及び地域では朝鮮半島、中国、台湾、フィリピンで記録がある。		
<u>形態</u> 前腕長 45～50 mm、頭胴長 45～70 mm、尾長 43～52 mm。体毛色はオレンジ色を帯びた明るい色である。飛膜の骨格に沿った部分、腿間膜がオレンジ色に対して飛膜、第 1 指、後足指、耳介先端が黒と対比が強い印象を与える。		
<u>生態</u> 国内での生態観察例は極めて乏しく詳細不明。		
参考文献 1)、2)、7)、45)、49)		

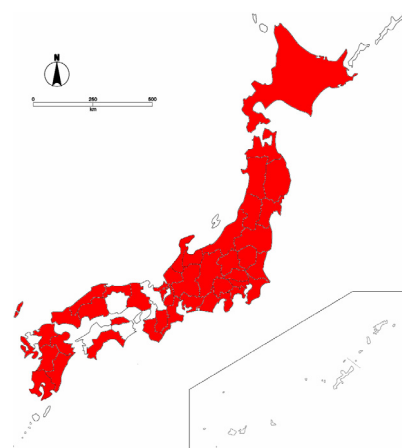
10.モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* Temminck,1840

—



分布

北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬、奄美群島に分布する。



形態

前腕長 34～41 mm、頭胴長 44～63 mm、尾長 32～45 mm、体重 5.5～11 g。体毛は暗灰色から灰褐色のバリエーションがある。いずれも下腹面の体毛が白っぽく背面とコントラストをなす。耳介と耳珠が細長い。*Myotis* 属の中では全体の体格が小型であるが後足は他種より大きい。

生態

昼間は自然洞穴のほか、導水路などの人工洞穴を利用して休息する。洞穴の壁の隙間や狭い岩の割れ目などに集団で潜り込んでいることも多い。ユビナガコウモリ、コキクガシラコウモリ、ノレンコウモリと同じ岩の隙間などで混群を形成することも知られる。一年に一度、初夏に1仔を出産する。出産コロニーは数十個体から数百個体の大きなコロニーサイズを形成することもある。洞内での移動では、幼獣が母獣の下腹面にしがみついたまま飛翔して運搬されることがある。

参考文献 1)、2)、16)、17)、24)、25)、27)、31)、32)、33)、34)、35)、37)、38)、39)、40)、46)、47)、48)、50)、51)、56)、58)、63)、65)、66)